

最近話題探しも儘ならず、且つ演習の外にイラク派遣関連行事等をも重なり、「朔東から」も久々である。と言っても、適当な話題を提供出来る訳ではなく少々焦り気味である。折りしも 2 月 4 日が二十四節気のひとつである「立春」であった。立春といえ、「春とは名のみ」(早春賦)で寒さは相変わらず厳しいが、日の暮れるのが真冬の頃に比すれば遅くなっており、春の足音が間違いなく仄かに聞こえると思うのは期待感の表れだろうか。

そこで、季節感が失われつつある今日、二十四節気を知るのも益無き事ではないと思い、調べてみた。コンクリートジャングル云々と一時期言われたが、そのような時代なればこそ、地方や田舎に出かけて季節を実感したいものである。止むを得ない場合でも、暦を見て、兎追し彼の山に思いを馳せるのも良いのではないだろうか。

二十四節気とは、一年を 24 等分 (12 個の節気と 12 個の中気) し、その区切りに名称をつけたものの総称である。中国の戦国時代に成立した。

二十四節気は、太陰暦の日付と季節を一致させる為に考案されたものである。従って、夫々の結節は季節の区切り目として受け取られているが、この名称は、二千何百年も昔の支那大陸の華北地方の気候に基づいて名付けられたものである。厳密には、日本の気候と合わないものがある。特に北海道ではその感を強くする。

因みに今年の二十四節気が、さる方から頂戴した「吉祥暦」に掲載されているので、紹介しよう。立春(2/4)、雨水(2/19)、啓蟄(3/5)、春分(3/20)、清明(4/4)、穀雨(4/20)、立夏(5/5)、小満(5/21)、芒種(6/5)、夏至(6/21)、小暑(7/7)、大暑(7/22)、立秋(8/7)、処暑(8/23)、白露(9/7)、秋分(9/23)、寒露(10/8)、霜降(10/23)、立冬(11/7)、小雪(11/22)、大雪(12/7)、冬至(12/21)、小寒(1/6)、大寒(1/21) (小寒と大寒は平成 16 年、赤字を節気といい、立春から一つおきにとったものを言う。黒字は中気である。)

上述の言葉を気象予報士が説明しているのを聞かれているものと思う。

これらを参考の為に簡単に紹介する。

- 立春：春の気立つ。現在では太陽の視黄経が 315 度の時を云い、2 月 4~5 日に当たる。旧暦では春は正月~3 月をいい、元日に春が始まることになっていたが、中国や日本では立春からを春と呼ぶことも多い。暦法上では冬至を 11 月のうちに置くということが基本になっているので、その約 45 日後にくる立春は 12 月 15 日から正月 15 日の間におさまって平均すれば元旦立春ということになる。12 月のうちに立春がくることを年内立春という。頻度からいうと新年立春より年内立春のほうがわずかではあるが多い。立春を正月節という。立春から 2 月節啓蟄の前日までを節月の正月と呼ぶ。旧暦に記載されていたかす多くは暦注のほとんどは節月に従うから、暦注の世界では立春に新年を迎える。事実、陰陽道では立春からを新年とするといわれる。春は名のみでと評される立春ではあるが、春立つ日とはもう寒さも峠を越えてこれからは春に向かうという意味で、とくに二十四節気の名の基盤となった華北の気候は日本より春

が早くくる。

- 雨水：正月の中(壬午)。雪氷融けて雨水となる如く、空から降る雪が雨に変わる頃。春一番の頃
- 啓蟄：蟄虫、すなわち冬ごもりの虫がはい出る意
- 春分：太陽の中心が春分点上に来た時の称。春分を含む日を春分の日という。春の彼岸の中日に当る。昼夜の長さがほぼ等しくなる。
- 清明：清浄明潔の略。気候もすっかり温暖となり、桃やスモモの花が咲き、柳が緑にけむって、まさに清明(すがすがしい)と呼ぶにふさわしい。唐代以降、郊外に出かけて酒宴を開く、いわゆる踏青(とうせい)の行事が盛んになったのも、新鮮な緑へのあこがれのためである。清明節は、禁火のために冷食する寒食節の後に直接連続する祝日であり、早朝になると、人々は一斉に新しい火を起こした。これを新火と呼ぶ。宮中で百官に下賜された新火は、ニレ(榆)や柳の枝を用いて起こしたものという。
- 穀雨：春雨が降って百穀を潤す意。柔らかな雨が降るようになる。
- 立夏：暦法上では4月節といい、七十二候では〈蛙始めて鳴く〉候に当たる。現在では太陽が視黄経 45 度にあるときと定義されている。詩歌では立夏の日からを夏と扱っており、ほととぎすが忍び音で鳴くころを迎えたのである。
- 小満：4月の中(壬午)。陽気が良くなり、草木が生い茂る。
- 芒種：芒(ノギ)のある穀物を播く時期の意。西日本では梅雨
- 夏至：太陽が天球上で夏至点に達し、北半球の昼の最も長く、夜の最も短い時。
- 小暑：この日から本格的な暑気に入る。蓮の花、蟬の声
- 大暑：暑さが最もきびしいとの意だが、実際は少しずれる。夏土用。
- 立秋：秋の始め。この日以降涼しくなるということで実際は最も暑い時期。
- 処暑：暑さが止み、新涼が間近い日。7月の中(壬午)。朝夕心地よい時期。
- 白露：秋分の15日。この頃から秋気が漸く加わる。玄鳥帰。鴻雁来。
- 秋分：太陽が秋分点に達した時の称。秋分を含む日を秋分の日という。秋の彼岸の中日に当る。昼夜の長さがほぼ等しくなる。
- 寒露：9月の節(セツ)。冷たい露の結ぶ頃。菊華香り、紅葉始まる。
- 霜降：9月の中(壬午)。霜の降り始める頃。朝夕霜で白くなる。
- 立冬：冬の始め。時雨の始まる頃。空っ風
- 小雪：10月の中(壬午)。陽射し弱くなり、冷え込み厳しくなる。平地にも雪。
- 大雪：太陽の黄経が二五五度の時で、11月の節(セツ)。氷初日の頃？霜柱
- 冬至：北半球では、正午における太陽の高度は一年中で最も低く、また、昼が最も短い。
- 小寒：12月の節(セツ)。寒の入り。
- 大寒：12月の中(壬午)。最も寒い時期。これから逐次に暖かくなる。

(参考:百科事典、国語辞典、各種HP、吉祥暦)

